

日向国延岡藩内藤充真院著

「五十三次ねむりの合の手」小考

神 崎 直 美

はじめに

本稿の目的は、内藤充真院の代表的著作である「五十三次ねむりの合の手」を、あらためて見つめ直し、充真院の人物像に関する新事実の指摘と、紀行文としての魅力をさらに明らかにすることである。

内藤充真院とは日向国延岡藩（七万石、譜代）の藩主内藤政順の夫人である。寛政十二年（一八〇〇）閏四月に彦根藩（三〇万石、譜代）の藩主井伊直中の九子（四女）として誕生し、充姫と名付けられた。幕府の大老井伊直弼の十五歳年上の異母姉である。夫・政順が天保五年（一八三四）八月に充姫が三十五歳の時に死去したため、その後、法名として充真院と称した。充真院は明治十三年（一八八〇）十月に八十一歳で死去するまで、四十六年間の長きにわたり、この呼称を用いた。充真院はたいへん聡明であり、知的好奇心

が豊かな人物であった。「五十三次ねむりの合の手」をはじめとする著作物を執筆できたのは、それ故といえよう。

これまでに「五十三次ねむりの合の手」がどのように紹介・研究されたのかということについてふれておきたい。まず、柴桂子氏が近世の女性が執筆した旅日記の数々を把握した成果の中で、それぞれの旅日記の見所について提示されたり、部分を引用・解説された際に、「五十三次ねむりの合の手」をその一冊として紹介している¹。研究対象としては伊能秀明氏が、「五十三次ねむりの合の手」を検討されて、その旅の全行程の概要の表や図を提示され、さらに『東海道名所図会』の風景を添えて、充真院の旅を紹介しつつ、文章の中に「おかしみ」が特徴として指摘できることを明らかにされた²。私は、「五十三次ねむりの合の手」を充真院の人物像を明らかにする素材として分析し、性格、感性、従者や旅で出会った人々との対人関係、教養、食べ物の好みなどを明らかにした³。

本文全体を翻刻して刊行した成果としては、宮崎県立図書館によるもの、さらに延岡の「充真院を学ぶ会」のメンバーによるものがある⁴。さらに前述の伊能氏と他三名が手がけられた成果として、旅の前半である陸路の旅に関する記述から十六箇所を抜粋して現代語訳を試みたものがある⁵。

ところで、「五十三次ねむりの合の手」の書誌に関しては、前述の柴氏、伊能氏、神崎がその成果の中で、丁数や挿絵の点数などについてふれるに留まっており、未だ提示されていない事項がある。しかし、書誌を検討することにより、この紀行文そのもの、さらには執筆をめぐる充真院の姿勢や人柄などについて、これまでに明らかにされてきた事実をより具体的に補強したり、さらに新事実を導き出す余地が未だ残っている。加えて、挿絵として描いた物についての絵解き、さらに文章表現の特徴など、未だ説明し尽くしていない点

が存在する。

そこでまず次章で「五十三次ねむりの合の手」について書誌的な面を明らかにする。その後、充真院の挿絵について従来指摘されていない点についてふれ、さらに文章そのものを見つめ、読み味わい、巧みで繊細な文章の実態と文章表現、さらには充真院の心の動き・思い、充真院に関する諸事実を明らかにする。そのためいくつかの原文を抜粋し、当該箇所について新たに作成した現代語訳を提示して、説明を付した。

「五十三次ねむりの合の手」をめぐる落穂拾いというべき本稿であるが、この紀行文の魅力、さらには充真院の人物像について、新たな発見を指摘したい。

- (1) 柴桂子『近世おんな旅日記』（歴史文化ライブラリー一三）（吉川弘文館、平成九年）、八八～九六頁。同著『近世の女旅日記事典』（東京堂出版、平成十七年）一七～八頁、一八一～二頁、一八九頁、一九一～二頁、一九五～六頁、二二八～二二九頁、二五五頁、二八三～四頁、二八八～二九二頁。
- (2) 伊能秀明「幕末東海道おんな道中記『五十三次ねむりの合の手』―日向国延岡藩主夫人内藤充真院旅日記の可笑しさについて―」（『明治大学博物館研究報告』第一〇号、平成十七年）は、見所というべき箇所について原文の抜粋と解説を付している。伊能秀明・小倉葉子・永田由香利・桑原理恵「現代訳『東海道五十三次ねむりの合の手』のおかしみ―幕末期大名家夫人の気ままな旅日記の世界―」（『図書館の譜 明治大学図書館紀要』第一六号、平成二十四年）では、見所について原文の抜粋と現代語訳を試みて提示している。
- (3) 神崎直美「幕末大名夫人の知的好奇心―日向国延岡藩内藤充真院―」（『岩田書院』、平成二十八年）、一一七～二〇二頁。
- (4) 宮崎県立図書館編集・刊行による翻刻は『内藤充真院道中記』（平成六年）に収載されている。
- (5) 「充真院を学ぶ会」による翻刻の成果は、『内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記』（明治大学博物館刊行、平成十六年）に収載されている。

一 「五十三次ねむりの合の手」について

「五十三次ねむりの合の手」は現在明治大学博物館が所蔵している。^①当博物館は藩政文書としての「内藤家文書」を所蔵していることが学界において著名であるが、「五十三次ねむりの合の手」は内藤家の私的な書類である内藤政道氏寄贈書の一冊である。^②したがって、充真院が存命中は本人が身近に所持していた私物——いわゆるお手元本——である。充真院のお手元本は、写本類と著作からなる。大名夫人の史料として極めて稀であり、かつ貴重なものである。^③

なかでも、充真院が四点の紀行文（旅日記）を執筆したことは注目すべきである。四点とは、「五十三次ねむりの合の手」「海陸返り咲こと葉の手拍子」「三下りうかぬ不調子」「午ノとし十二月より東京行日記」である。^④

この紀行文は、充真院が初めての旅について執筆した紀行文である。幕府が文久二年（一八六二）に参勤交代制の緩和として大名家の奥方たちに領地に転居することを命じたために、充真院は江戸の六本木屋敷から延岡へ転居するために旅に出た。旅そのものは、文久三年（一八六三）四月六日から六月二日である。

それに加えて、末尾に延岡での見聞を四つ記している。それらは、七月十日の台雲寺参拝、八月二十六日の築獵見物、九月一日の農村見物、十月九日の今山八幡宮の神輿見物である。充真院は延岡に到着してから、七月から十月までの間に一ヵ月ごとに一回、延岡で見聞をしているのである。したがって、実質は文久三年見聞記（見聞録）なのである。記載は原則として一日ごとであり、いわゆる日次ひなみの記載であり、換言すれば

日記体である。

旅の記述を注意深く読むと、文中に後日談が散在している。後日談の存在から旅の最中に備忘録に旅の見聞を記し、到着してから執筆したことが明らかである。これは、充真院が旅を始めた時点から、旅について著作を執筆する意識を有していたことがわかる。故に、冒頭から文末まで一貫して克明な記述なのである。

「五十三次ねむりの合の手」を執筆した当時、充真院は六十四歳である。老年期であり、人生の喜びも悲しみもかみしめた年代であり、さらに情緒の面は深まりを帯びた時期でもある。知恵・知識の充実期であり、人格の完成期でもある。隠居の立場ながらも、六本木屋敷（下屋敷）の主人として周囲の人々から尊重され、かつ自らもその立場をわきまえ、矜持を持って生活していた。

充真院の人生は、二十歳の頃生まれた子供はこの世に三日しか生を得られず、さらに、夫・政順と三十五歳で死別するなど、内藤家に嫁いだから家族の縁が薄かった。しかし、旅の二年三ヶ月前から孫（実際は姪）の義姫、改め光姫と共に生活し、光姫を慈しみながら、家族としての幸せな日々を味わっていた時期であった。光姫は充真院の養子（実際は異母弟）の政義と延岡在住の側室から生まれた。延岡で生まれ育った孫娘を江戸に呼び寄せ共に暮らし、孫娘を自ら躰け、江戸を見聞させながら、充真院はささやかな幸せの日々を過ごしていた。しかし体制の変化により、江戸が不穏となり、延岡へいわば疎開のため転居の旅に向かうこととなったのである。その無念な思いを充真院は、「夫に孫娘も、此二とせ計、日向より呼のほせ、また江戸の所々も見せ、行義を初おしへんと思ひしかひもなく」と簡潔ながらも的確に記している。⁵⁾

執筆の背景は、充真院のそれまでの人生における知的活動によるものであろう。まず、指摘すべき点としては、他者が執筆した紀行文を読み、その楽しさ、魅力を実感していたことである。⁶⁾ 本来、大名の正妻であ

った充真院の立場では、江戸屋敷から容易に離れることは出来ず、旅をすることは有り得ない事であった。未知の場所については、他者の紀行文を読み思いをはせる楽しみは格別なものであったことだろう。そして、もしも自分に旅の機会があれば、非日常の見聞を紀行文にしたためたいという、憧れのような気持ちがあったのだろう。未知の地に対する憧れや、それを知る楽しさを実感していたからこそ、自分も紀行文を執筆することを行動として実現できたのである。かつての紀行文の読書が、充真院にとつて良い体験であったからこそである。そして、そのような機会を因らずも得た充真院は、旅の見聞を執筆して、身近な人々や、いずれ江戸に残った人々に知らせたいと思つたのであろう。

充真院の本心としては、江戸から離れがたく、不本意で鬱々とした悲しみの中で旅に出た。そのような心を抱きながらも、旅が終わったらいずれ紀行文をまとめられるよう、心に留めており、見聞について周到に備忘録をつけていたからこそ、後に優れた紀行文をまとめられたのである。

そして、なによりも「五十三次ねむりの合の手」の原文をながめると、詳細な描写や素直な感情を織り込んだ明確で豊かな文章、熟練した巧みな挿絵、達筆な筆跡からなり、実に優れた著作であることがわかる。旅の機会があったとしても、誰でもこのような紀行文をしたためることはできない。「五十三次ねむりの合の手」は、充真院がそれまでの人生において、豊富な読書経験、長年にわたる文章表現力の研鑽、絵を鑑賞したり自らも描くこと、感動した事を和歌に詠むなど、知的な生活を長年の日々において積み重ねていたからこそ珠玉の紀行文として実現したのである。充真院の生来の聡明さに加えて、これまでの人生における知的活動の賜物であり、集大成といふべき存在がこの紀行文であったといえよう。

次に「五十三次ねむりの合の手」の書誌について見ていこう。体裁は、縦二五・三cm、横一七・一cmであ

る。習字に用いる半紙を半分折にしたサイズにやや小さいが、概ね同じといえる。厚さは小口でおよそ一・八cmほど、軽く押さえると一・四cmである。

表紙は明るめの紺色の後補表紙が施してある。この表紙の状態は新しいものであり、充真院がつけたものではなく、明らかに後世の紙である。同じ料紙の表紙が他の充真院の著作―例えば、「海陸返り咲こと葉の手拍子」や「三下りうかぬ不調子」などの紀行文、日常についての関心をまとめた雑記「色々見聞したることを笑ひに書」にも付けてある。推測では内藤家が昭和の頃に施したのではないかと思われる。これは、後世の内藤家が充真院への尊敬、さらにはその形見といえる著作を貴重なものと認識し、後世に大切に継承したいと考えたこととの反映といえよう。

後補表紙以外の料紙―すなわち充真院が実際にこの著作を作成した際に用いた―は、当時、藩政文書をはじめ日常的に用いるごく普通の和紙である。大名家の隠居という立場である充真院だが、特別美しく装飾を施した料紙を用いていない。これは、充真院が華美な物を好まず、日常においては質素・簡素を大切にしてきたことの証拠といえよう。日常使いの料紙を用いたことも、充真院らしさが表れているといえるのではないだろうか。

六本木屋敷の主人である充真院は、実は実家の井伊家から潤沢な生活資金を支給されていた。管見ではあるが、安政三年（一八五六）の記録を例として示すと、一年に二〇〇両とさらに増金として三〇両を支給されていたという⁹⁾。それでも、この金額では下屋敷の主人としての生活を賄うことはいへんであり、常に質素・儉約を余儀なくされていた。本人の性格に加えて、当時の実家井伊家と内藤家の財政事情は、他の大名家にも共通するように逼迫している事を充真院は把握しており、それ故、自らも日常において質素を心がけ

て行動していたのであろう。

なお、丁数は墨付八六丁である。充真院が執筆した際に付けた表紙は本文と同じ質の料紙を用いている。興味深いのは、表の表紙は料紙を二枚重ねて綴じてある点である。他の本文は全て一枚の料紙を二つ折りにしてあるが、表の表紙のみ二枚重ねなのである。これは、充真院が表紙については補強するために二枚重ねにしたのである。あらためて厚みのある料紙を用意することなく、本文と同じ日常使いの料紙で利用した点も、手元にある品を有効利用する充真院の姿勢の表れである。

しかも、二枚重ねにした内側の料紙を丁の内側を覗いてみると、反故紙を利用したことが確認できる。しかもこの反故紙は「五十三次ねむりの合の手」を執筆した際の書き損じなのである（詳細は一四三頁）。二枚重ねにした内側の左の外側に書き損じた文字が見える、しかも天地を逆様にしているので、一見したところ反故紙が内側に使われていることは、全くわからない。用いる際にも、反故紙とわからないようにささやかではあるが工夫しているのである。反故紙を利用した形跡は、この表の表紙だけである。

たった一箇所だけであるが、それでも何も記載していない新しい料紙を用いずに、反故紙を使用したという選択は、充真院が実に質素であり、物を大切にすることを心がけていたことの反映といえよう。しかも、この執筆は充真院にとって人生の中で稀なる見聞であり、身近な人たちに伝えたいと思いき書き留めた作品で、人生の記念碑というべき存在である。確かに当時、紙は貴重な品であり、反故紙は回収されて漉きなおされて再利用される。社会全体としても資源は徹底的に大切に利用されていた。大名家の奥方であった充真院が、一枚の反故紙すら無駄にしなかった様子が窺われる貴重な証しである。しかも、庶民よりも豊かな名家である。実にさりげない事実であるが、充真院の人間性ゆえともいえよう。

装丁はごく平凡な四つ目綴じである。もっとも、後補表紙を施した際に、綴じ糸も充真院がまとめた当時の糸ではなく、新しく綴じ直した後世の糸である。

さて、「五十三次ねむりの合の手」の文体について見てみよう。文体は漢字と平仮名を併用して記載している。大部分が書き下し文であるが、ごくわずかに「致不申」のような漢文体もある。¹⁰ 当時の一般的な文章の書き方通りに文語体で候文であり、一文がたいへん長い。主語の省略も多く、一文の中で主語が変化していくので、読み手が主語を考えながら読む必要がある。さらに、句読点や濁点が無いので、¹¹ どこで意味が切れるかを、考える必要がある。書体は草書体（くずし字）で、基本的な御家流の書体を用い、若干の例外（詳細は一五六頁）もあるが概ねは達筆に丁寧にしたためてある。漢字はこれも当時の常であるが、あて字も多々用いている。一例としては「行儀」を「行義」、「富士川」を「藤河」と表記している。¹²

振り仮名の特徴は、動詞を表す漢字に続く平仮名を付さない、もしくは平仮名が少ないことである。例えば、「成る」は「成」、「聞き」は「聞」、「見合わせ」は「見合」、「詠む」は「詠」、「向かい」は「向い」、「忘れて」は「忘て」などと表記する。¹³ したがって、助詞を補いながら読む必要がある。

本文の行数にも注目したい。「五十三次ねむりの合の手」は、原則として半丁ごとに十三行で記載している。当時、白紙に行数を揃えて記載する際には、綴じ込みも考えて半丁よりも少し小さい用紙に罫線をはっきりと記した用紙を用意して、それを料紙の下に添えて、下敷きとして行数を整えて記載する。そして、十三行で記載されている箇所¹⁴の文字は、くずし字ではあるが一字ずつ丁寧にしたためている（写真1）。

しかしながら、十四行、十五行、十六行の箇所が例外的にある。それは、半丁に大きな挿絵が描かれて文字数が少ない場合と、大坂見物について記載した箇所である。とりわけ、大坂見物に関する記載が十四〜十

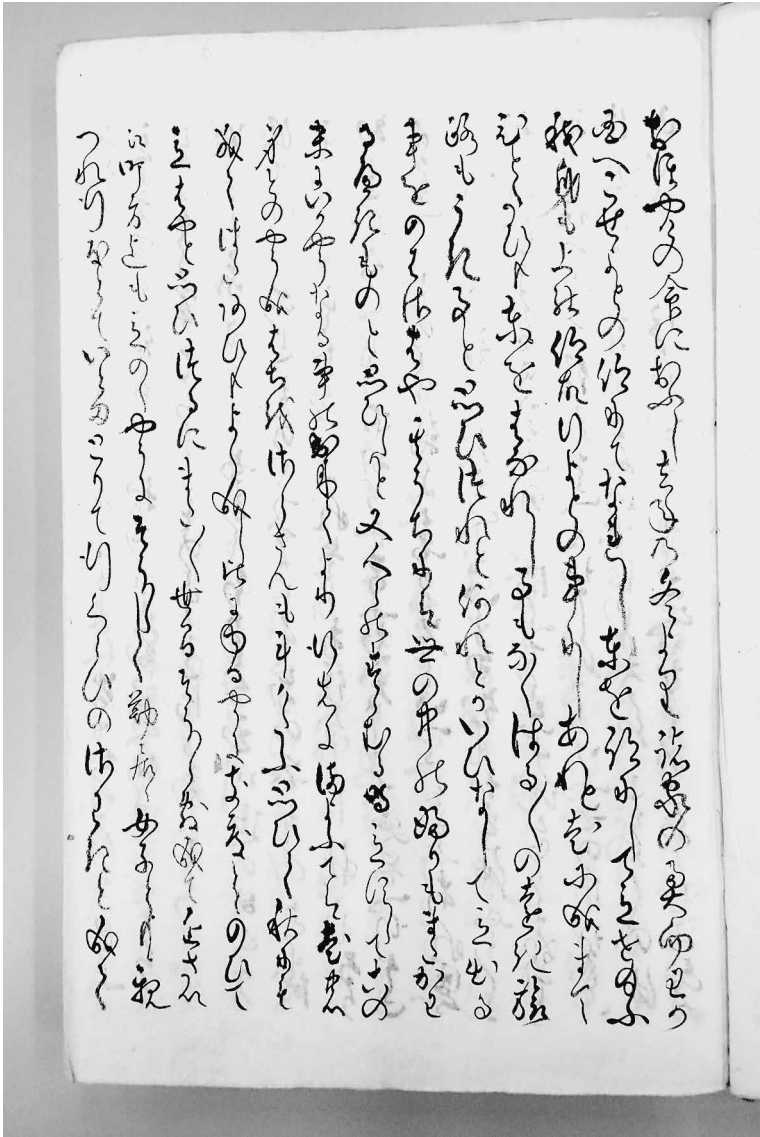


写真1 冒頭の丁 (13行)



写真2 大坂見物の丁 (右16行・左15行)

六行であることに注目したい(写真2)。行も多
いのだが、文字が十三行の箇所よりも小さく、丁
寧さを欠き、走り書きのように見えるのである。
しかも、誤字を墨で消している。これは、本文中
さらには挿絵として描いた料理屋の「福屋」を
「ふくや」と記した箇所などで、誤記の所に墨を
引いて書き直してある。

右の様子から、大坂見物の箇所については、本
来は下書として記した用紙を、あらためて清書す
ることなく、そのまま本文に利用したのではない
かと思われる。もう一つの可能性としては、大坂
見物はこの旅の中で移動の途中であり、大坂屋敷
に滞在しての見物であったので、他の移動の行程
とは異なる行動と充真院が意識して、特記として
小さめの文字で書いたとも考えられる。しかしな
がら、誤字の部分を上から墨を引いて消すという
ような点があることから、清書とは到底思えない。
やはり、大坂見物に関する部分は下書をそのまま

利用したと見なしてよいのではなからうか。

この紀行文の記述量をイメージするために、文字数を元に一つの目安を示しておこう。明大翻刻本の全八七頁分から文字数をおおまかに算出すると五八九五一文字である。四〇〇字づめ原稿用紙でおよそ一七四枚である。これに挿絵が六五点も加わるのである。以上から、当時としては読み応えのある分量の紀行文といえよう。

- (1) 明治大学博物館所蔵、内藤政道氏寄贈書、架号(二) 充真院(繁子) 関係(I) 一二。
 - (2) 内藤政道氏寄贈書とは、藩主の内藤義概と充真院が個人として所有していた書類・書籍が主である。
 - (3) 充真院の一連のお手元本の中に刊本が無い点はいへん不自然である。「五十三次ねむりの合の手」を読むと、十辺舎一九著『膝栗毛』(「東海道中膝栗毛」)を充真院が読んでいたことが窺えるが(前掲拙著の一九三頁や、同「本と大名夫人―日向国延岡藩内藤充真院の場合―(城西大学水田記念図書館報「Book Mark」、平成三〇年)、現存する充真院の蔵書群には現存していない。さらに「五十三次ねむりの合の手」からは、『東海道名所図会』や『摂津名所図会』も充真院は読んでいた可能性が窺えるが、これらも同様に充真院の蔵書群には現存していない。内藤家は近代に充真院のお手元本や内藤家の他の蔵書を一括して目録を作成して、刊本の多くを内藤政學と所縁のある慶應義塾大学に寄贈(内藤文庫、後に戦災で焼失)している。その際に、充真院がかつて所持していた刊本も含まれたものと思われる。なお、明治大学博物館に近年新たに内藤家から寄贈をうけた近代文書群がある。その目録である「内藤家文書二〇一四年度寄贈 近代史料仮目録」に、「蔵書目録」(史料番号十八、十九、二〇)がある。これらは、元は一連の三冊本である。目録に収載した書物の番号として「蔵書目録」の一冊目は一から三〇二五、二冊目は三〇二六から四〇一三、三冊目は四〇一四から四八六七と記しており、したがって書物の総数は計四八六七である。これらの冊数は一七四四〇点とある。
- 「蔵書目録」の各冊の文末に、「昭和十四年七月二十一日」の記載と延岡邸家扶の内藤興二郎の署名と印がある。十八の「蔵書目録」の文末には、延岡合同運送店から東京邸へ運送された旨が記されており、収載された書物

群が当時延岡にあったことが確認できる。かつて江戸屋敷で保管していた書物類を、近代になって延岡に移していたのである。それを再び東京に移したのである。史料番号二〇の「蔵書目録」の冒頭には、慶應義塾大学に四種に分けて寄贈した旨を記してある。一冊目である史料番号十八の目録を見ると、「東海道名所図会」が史料番号六六七と六七六として二冊記載されている。さらに、『撰津名所図会』が史料番号六六五として記載されている。これが充真院のお手元本か否かはわからないが、内藤家の蔵書として所蔵されていたので、これを充真院が読んだ可能性がある。

(4) 「海陸返り咲こと葉の手拍子」は六六歳、「三下りうかぬ不調子」は六九歳、「午ノ」と十二月より東京行日記」は七三歳で執筆した。いずれも老年期の執筆である。前掲拙著、四一〜二頁でふれた。

(5) 前掲拙著、七頁。

(6) 前掲拙著の四四頁に充真院が読んだ他者が執筆した紀行文の具体的書名を指摘した。

(7) 「色々見聞したる事を笑ひに書」は内藤政道氏寄贈書で、架号(二) 充真院(繁子) 関係(I) 一七。

(8) 前掲拙著の五二頁で、充真院の蔵書(お手元本)の六割は、本文と別紙の表紙を付けずに綴じていることを指摘した。

(9) 安政三年の「万覚帳」(明治大学博物館所蔵、内藤家文書、架号、第一部・七・一四四。マイクロフィルム六三六)に、「充真院様江年々金子貳百両、并増金三十拾兩ツ、被進候處」と、井伊家から充真院に多額の生活費が支給されていたことがわかる。なお、この記事に続いて、当時井伊家は財政難であり、この援助金を五年間程、三割減にしたいと申し出があった旨、記載されている。

(10) 明大翻刻本、三八頁。

(11) 翻刻本に一箇所だけ、平仮名に濁点を付した翻刻がある。それは、明大翻刻本の二二頁と宮崎県立図書館翻刻本の二二頁に相当する箇所で、「ば」と翻刻している。原本を確認したところ「婆」であった。「婆」は「ば」とも読むが、この文字は当時、平仮名として「は」としても用いる。当該文字は助詞として記載された箇所であり、その前に「つきぬれ」とある。したがって、読みとしては濁音で「ば」と読むが、表記としては「は」と翻刻すべきである。

(12) 明大翻刻本、七頁、二二頁。

(13) 明大翻刻本、七頁、八二〜三頁。

(14) 挿絵の数については前掲拙著、一二〇頁。拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像―『五十三次ねむりの合の手』を素材として―(1)」「(2)城西大学経済経営紀要』第三〇巻、平成二十四年)の六二―三頁に挿絵の一覧表を作成して掲載した。

二 挿絵について―小さな描写、および絵解き―

「五十三次ねむりの合の手」は充真院が描いた挿絵が魅力でもある。挿絵については前述した拙著で、六十五点も挿絵があることをはじめとして、描いた対象、間取り図をよく記していることや、鳥瞰としての視点で景色を描いていること、見開きを用いてパノラマで広大な海の景色を描いたこと、本文中に絵文字のよくなカットを施すことや、彩色についてなどを指摘した。¹⁾加えて、パノラマとして描いた場合など、文字の配置を工夫しており、充真院がすぐれたデザイナーの感覚を有していたことがうかがえる。

挿絵は墨が主だが、彩色もあり、赤(太陽・鯉・花)、薄緑(植え込み)、薄青(海)、薄紫(花)である。²⁾墨について注目したい。濃い墨色は、主に輪郭線として用いている。その他に、墨の濃度を調整して薄めて彩色としても用いている。薄墨を塗った場所は、景色や庭などである。一例として箱根の福住の屋敷の挿絵をあげておきたい(写真3)。薄墨を彩色として用いることによって、遠近感や立体感を巧みに表現している。薄墨のたくみな用い方は、充真院の絵を描く技量が高いことを示しているよう。

充真院の絵を描く技量が優れていたことについて、本稿で新たに指摘しておきたい点がある。それは小さく描いた対象物から、充真院が実に絵を描くことに習熟していた様子がうかがわれることである。小さく描

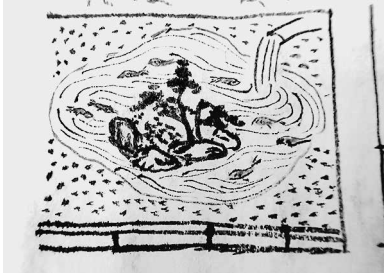


写真4 福住の池の鯉



写真3 福住の屋敷

物、同二十八日の蒲江の浜辺の人物などがある。右の挿絵を、鯉を描いたもの、1cm未満で人物を描いたもの、1cm以上の人物の順に分けて見ておこう。

まず、箱根・福住の池の鯉についてである。一つの池の鯉は、墨で輪郭線を引き、朱を施している(写真4)。八匹の鯉が描かれているが、その体長は4mmと5mm(以下、長さはいずれも原本から)である。体長5mmで描かれた鯉の頭の部分の太さは1mmである。輪郭線は○・二五mmにも至らない、極めて細い点である。しかも、鯉の輪郭線の太さは一定している。細い筆というよりも、尖らせた竹ひごのようなもので輪郭線を描いたので

写した筆使いの上手さについては、「五十三次ねむりの合の手」の原本の挿絵を眺めてこそ確認できる。

小さく描いた例としては、四月十日の箱根・福住の庭の二つの池の鯉、同十二日の倉沢の海辺の人物、同十四日の大井川の川渡り、同二十三日の石山寺参詣の人物、同二十八日の新清水寺の人物、五月七日の兵庫和田明神の人物、同十一日の大楠の海辺と船上の人物、同十七日の六嶋の海辺の人



写真7 兵庫和田明神の浜辺



写真5 福住の池の鯉

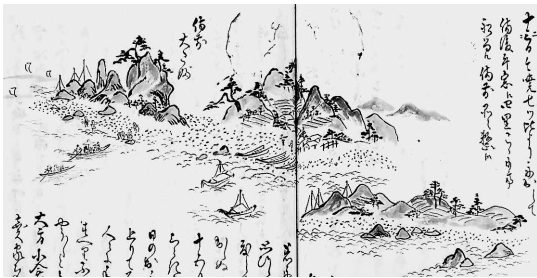


写真8 備前大榎

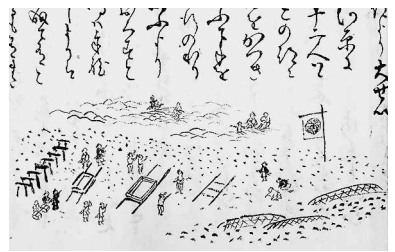


写真6 大井川の川渡り

と際鮮やかである。

次に、1cm未満で人物を描いた挿絵の例である。倉沢の海辺の人物は、体長が7mm、八mmであり、これも少ない線で描写している。大井川の川渡りの人物は、体長が7mm、八mm、八・五mm、九mmで、平伏している人は四mmである。いずれも1cmに満たないが、それでも

はなかるうか。輪郭線は迷いがなく、最小限の筆づかいでありながら、尻尾や体の様子に動きが感じられる。もう一つの池の鯉は、輪郭線を描かずに、朱のみで描いている（写真5：筆者註、当該箇所右側「鯉八匹」の写真である）。全十二匹の鯉は、体長四mm、四・五mm、五mm、六mmである。小さいながらも、この鯉も動きが感じられ、しかも、他の墨で描かれた風景の中でひと際鮮やかである。



写真10 新清水寺門前



写真9 石山寺寺内

川辺の人物は武士、人足などを髪型や着衣の様子や有無で、これも最低限の筆数で描き分けている（写真6）。

兵庫和田明神の浜辺の人物は、体長が二・五mm、三mm、三・五mm、四mmである。二・五mmは子供である。この箇所的人物のみ点描である。前述の線描の絵よりは漠然としているが、女性の場合は、結び上げた髪の毛のシルエットで判別することができる（写真7）。

大楯の場面は、海上の船に座っている人物を、三mm、四mm、五mm、浜辺の人物は四mm、五mm、五・五mm、六mmで描いた。描き方は線描である（写真8）。六嶋の浜辺の人物も線描で、体長を二・五mm、三mm、三・五mm、四mm、五mm、六mm、七mmで描いた。蒲江の浜辺の人物は、体長が三mm、四mm、五mm、四・五mm、五mm、六mm、七mm、八mm、白の陰で上半身のみ描いたものは二mm、三mmである。これらはいずれも一cmに満たないが、髪型や服装、持ち物から、充真院らの一行、または現地の人を、最低限の線で描き分けている。

以上から、充真院が一cm以下で鯉や人物を少ない線の確に描いていた様子が確認できる。全く無駄のない線で、失敗することなく確実に描ききることができたのは、長年にわたり充真院が絵を描くことに親しみ、かつ技量が優れていたからこそである。

一cm以上の体長で描いた人物がある挿絵は石山寺参拝で、一・二cm、一



写真13 御付の女中



写真11 充真院の駕籠

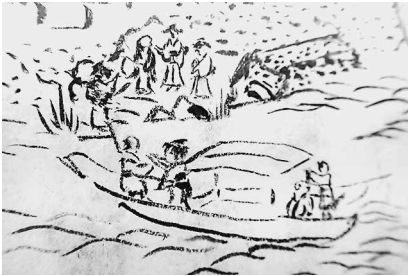


写真14 御付の女中



写真12 光姫と御付の女中

cmの人物がいる。もつとも、この絵には、五mm、六mm、七mm、八mm、九mmで描いた人物がいる。画面の遠方にいる人物は体長を五mm、六mmで描いている。遠近感をさりげなく表現しているのである(写真9)。新清水寺を参拝している人物は、体長を八mm、一cm、一・一〜三cm、一・六cm、一・七cmある。人物を線描で描き、髪形、着物、刀、などが前述の一cm以下の人物よりもより明確に描かれている(写真10)。

ところで、挿絵について興味深い場面についていくつか絵解きをしておく。充真院が乗っていた駕籠、および御付の者たちが描かれている場面についてである。

まず、駕籠については五月二十日に訪れた糸崎の浜辺の挿絵である(写真

11)。地面に下ろした駕籠を三人の男性と三人の女性が囲んでいる。駕籠は簡素な御忍駕籠である。隠居の身である充真院は、既に天保十年（一八三九）四月に鎌倉にある光明寺の内藤家墓所に出かけた際に御忍駕籠を用いていた。したがって、文久三年の転居の旅でも御忍駕籠を用いた可能性を前掲拙著で指摘したが⁴、この絵はまさしく充真院の駕籠を描いているとみなしてよからう。

駕籠の出入り口の前に羽織を着用した重役らしい武士がおり、その後にもう一人男性がいる。残り一人の男性は、駕籠の背面にいる。男性三人は立っている。女性の一人は駕籠の前にしゃがみ、その後に傘を掲げて立つ女性が一人、続いてもう一人女性が立っている。しゃがんだ駕籠の出入り口には履物が置いてある。この場面はまさに、充真院が駕籠の扉を御付の者に開けてもらい下りてくる、その直前の様子を描いたのである。

光姫と御付の者たちが描かれた場面としては、五月十一日に大榑へ本船を繫留している間に、光姫とむつ、下女らが本船から小船に乗り換えて浜辺に遊びに向かう挿絵である（写真12⁵）。中ほどに傘を掲げた小船に光姫と御付の女中らが乗っている様子を、本船に残った充真院が描いたのである。傘の下で、進行方向を向いて座っているのが光姫であろう。

次に御付の者たちが描かれている挿絵をあげておきたい。それは、延岡に転居してからの見聞である八月二十六日の松山での鮎築漁見物に行く途中の様子である（写真13）。五ヶ瀬川を屋方船で移動している一隻に、五人の女性たちが座っている姿が見える。そのうち、進行方向に座った三人のうち、真ん中の女性は髻が低く描かれており、この中で年配であることがわかる。しかも、貫禄も感じられる。したがって、女中の最高位である老女の砂野であろう。充真院は短髪であり、光姫は稚児輪であるが、二人の姿は描いていない。

もう一つ御付の者たちを描いた場面としては、五月二十八日の蒲江の港を描いた挿絵である(写真14)。一行は本船から伝馬船に乗り換えて上陸した。既に第一陣として伝馬船で上陸した女性三人と、広げた扇子を手にした頭を剃り上げて羽織を着た男性が一人いる。この男性は髪型から察するところ、侍医の喜多尚格であろう。岸の手前にこれから着岸する船が描かれている。船首には水夫の他に、水夫に右手を上げて指示しているような様子の女性の姿が一人見える。充真院はこの上陸の際に「大てんまに乗て、先向之岸に上り」、すなわち大きな伝馬船に乗って向かいの岸に上陸したという。確かに写真14の船の中央部には、簡素ながらも四方に柱を設え屋根を支えており、伝馬としては大きな船であることがわかる。

中央部の内側の様子はあえて描いていないが、ここに充真院が乗っており、これから上陸するところなのではなからうか。前述した水夫に指示している女性は髻がやや高いので、充真院の御付の女中の第二位である中老の長尾ではなからうか。

- (1) 前掲拙著、一二〇～四頁。
- (2) 前掲拙著一二三頁で彩色は朱、薄緑、薄青の三色と記したが、薄紫も一箇所―金比羅宮の金光院の玄関横の植え込み―に躑躅の花の色として朱と共に薄紫も彩色されているので訂正しておきたい。
- (3) これらの挿絵の箇所を明大翻刻本で順に示すと、十六～七頁、二二頁、二三頁、三三頁、四二頁、五七頁、六二頁、六八～九頁、七八～九頁などである。なお、人物として体長が大きい例としては、延岡に転居してからの見聞である十月九日の今山八幡宮の神輿行列の旗指物を背負った行列の人物である。人物の体長を、二、三～五cmで描いている。この箇所は、明大翻刻本では九四頁である。
- (4) 鎌倉への旅で御忍駕籠を用いたことについては、拙著「日向国延岡藩内藤充真院の鎌倉旅行―光明寺廟所参拝と名所めぐり―」(『城西人文研究』第三〇巻、平成二十一年、七八頁。前掲拙著、二二八頁。

- (5) 五月十一日の記述は明大翻刻本の六〇頁、挿絵は明大翻刻本の六二頁である。
 (6) 充真院の髪型については前掲拙著の一三七頁、光姫の髪型については前掲拙著の一四七頁。
 (7) 引用箇所は明大翻刻本の七六頁。

三 充真院の文章、および現代語訳

「五十三次ねむりの合の手」は充真院の優れた文章表現力がその魅力である。旅の見聞が詳細に綴られ、充真院の折々の心情も記載されているので、旅の様子が具体的に生き生きと読み手側に伝わり、充真院の作者としての力量を実感する。文章表現の豊かさと巧みさを読み味わう楽しさを有した著作でもある。私は近年、充真院に関する講演会の際に、研究成果の公表と共に、検討素材として利用した充真院の著作について、新たに現代語訳を作成して紹介する機会を得た。^①現代語訳を作成する過程で充真院の原文を繰り返し読み、これまで実証史学の立場から分析素材として向きあつてきた視点に加えて、文学作品としてその文章表現や音読した際のしらべの美しさも高く評価されるべきであると思つた。

そこで本章では「五十三次ねむりの合の手」から、充真院の感情、風景描写、内藤家の立場などの記載から八箇所を選び、まず充真院の原文を掲げ、当方の現代語訳、さらに若干の解説を付す。^②原文には当方の解釈による読点を施した。現代語訳は従来の先行研究で伊能氏と他三名による部分を選び提示された優れた成果があるが、主語の補い方により現代語訳として異なる解釈ができる部分もある。充真院の文章そのものを眺め、現代語訳と比較して読み味わいながら、その事項について注目したい点を示したい。

史料1 冒頭 転居をめぐる心の葛藤

原文

おほやけの命におふし、去年の冬より諸家の奥向わか国へこせよとの仰にて、なれし東を跡にして立せ給ふ、我身も上の仰故、行よとの事にしあれと、老に成までひとたひも東をはなれし事もなく、はるはるの遠き旅路もうき事と思ひつれと、何れとかいひなして、立出る事をはさや、其うちには世の中のふりも、またかわるへきものと思ひしかと、又人々のすゝむる時立すして、この末にいかやうなる事の出来てより、行先にまよふては、老の身とのやう成はちをさらさんも計かたふ思ひて、秋にも成て、はたあいもよく成し比に、ゆるやかに支度と、のひて立はやと思ひつるに、またまた世間そうそう敷成て、近さいへ町方迄も立のくやうにそうそうしく勤居候、女・子とも、親つれ行度とて、いとまとりて行くらひのさわきと成て、此地に居ては公義もよろしからず、皆も心つかひゆへ、早ふ立候方宜敷、

現代語訳

幕府の命令に従って、昨年・文久二年（一八六二）の冬から大名家の奥方や家族は、江戸屋敷から領地に転居するようにという通達をうけて、住み慣れた江戸を離れて領地に出発なされた。私も幕府からの命令なので、領地の延岡に転居しようと思った。しかし、数え年で六十四歳という老年になった現在まで、生まれ育った江戸を一度も離れたことがない。さらに、とても遠方にある延岡まで長い旅をするのはつらい。そこで、何かと理由をつけて、江戸屋敷から出発することをひき延ばしておけば、そのうちに世の中の状況も変わるに違いないと思った。そう思いながらも、周りの人たちが江戸屋敷を退去するよう勧められているにもかか

わらず転居しないでいた場合、その後江戸で思いがけないたいへんな事態がおきて、もはや出発の機を逃して避難する所がなくなるかもしれない。そのようになったならば、老年の身でありながら恥をさらすことになるかもしれないも思った。

そこで秋になって、もしかしたら時勢が落ち着いた合間があれば、その頃にゆつくりと準備をして江戸から出発しようと思っていたところ、またもや世間が騒がしくなり、江戸から近郊の農村に町人までもが避難のために転居しようとする程、騒がしさがましている。江戸屋敷に奉公に来ている女性や子供たちの親たちが心配して、それぞれの身内を故郷に連れて帰りたいと言いつ出し、奉公を中断して江戸屋敷から戻りたいというほどの騒ぎとなった。もはや、江戸屋敷にとどまっただけでは、幕府に対しても申し訳なく、江戸屋敷の者たちも心配しているので、早く出発したほうがよいだろうと思うに至った。

解説

幕府から命令が出たが、当初、すぐに転居せず、なんとか江戸から離れずにすまないものだろうかと思いつめぐらし、充真院自身の意志で、何かと理由をつけて転居を引き伸ばしていた様子が窺える。聡明であり、六本木屋敷の主人としての自覚・矜持を有する充真院が、幕府の命令や世情を認識しながらも、ここまで自らの意志を通したのは、江戸を離れぬ領地に転居することが、江戸で生まれ育った充真院にとって、これまでの人生の中でも絶望的な事件であったからである。充真院は自らの悩み揺れ動く心の様子を克明に描写している。事態を受け入れて転居を決意する感情に至るまでに苦悩したが、周囲の者たちが江戸の状況に動揺・心配している様子を理解して、最終的には充真院は転居の旅に出ることに納得したのである。充真院は長旅をつらいものと意識しており、さらに江戸から退去せずに恥をかくことになってはいけなさと、当

時の人物らしく恥の意識も窺える。

さて、第二章で前述した充真院が反故紙を表表紙の内紙として利用していたことにふれた。その反故紙は、実はこの冒頭の部分の書き損じである。表表紙の内側の書き損じは文章として「おほやけの命におふし、去年の冬の頃よりして、諸家の奥」と記している。充真院はこのように書き始めたものの、ここで筆を止めた。この文の右に「おほ」左に「おふやけの」「おほや」などの文字もある。どうやら充真院は、「おほやけ」「おふやけ」のどちらが表記として適切なのか、一時迷ったのである。完成した本文の冒頭は、「おほやけの命におふし、去年の冬より諸家の奥向」と記載しており、反故紙に記載していた文から推敲の結果、「の頃」「して」を省いてすっきりした表現にしたのである。些末な事ではあるが、充真院の執筆時の一瞬の様子が窺われる。

史料二 四月六日（一日目） 感謝の念

原文

いかにうき世の事とても、かわりはてる旅と思ひつゝ、けて、夫につゝきては、親・兄弟わかれわかれに成行なから、よくも供してくれしと思へは、又うれしう

現代語訳

どんなにつらい世の中であっても、江戸を離れて見知らぬ遠い土地へゆかなければならないという思いがけない境遇になってしまった旅であると、悲しく思い続けていた。そして、江戸に親や兄弟が居る御付の者が、私の旅に同行するために身内と離ればなれになりながらも、よくぞ私に同行してくれるものだ、とあら

ためてうれしく思った。

解説

江戸から離れることは、江戸生まれの充真院にとつては、都落ちに相当する。六十四歳という高齢の身でもあるので、余計に自らの運命を嘆き続けたのである。自分も悲嘆にくれているのだが、御付の者や家中の者たちが充真院が延岡に転居する旅に同行してくれることにも目を向けている。江戸屋敷で親や兄弟が奉公している者（例えば、佐久間泰三郎恭明。弟も江戸勤務）が、身内と離れて付き添ってくれることに、心から感謝している。身分制社会であるが、御付や家中の者が同行することに対して、当然と思わず感謝の念を抱けるのが充真院ゆえであろう。充真院の謙虚さ、思いやり、優しさが文中からにじみ出ている。

史料三 四月十日（五日目） つぶさな観察・趣深い庭

原文

福住之座敷梅の間といへは、梅の張附、掛物も梅の絵出し候、道具も大方は梅付、天上に梅の間とはり附、何れの間も右の通り客の見安き為之由、（中略）庭はつき山から泉水にして井有、井のなかより湯け出であり、是も湯成へし、庭けしきにして卯月の初故、つくし・杜若なそも植、撫子・外の草花杯も山にあしらいに植て、江戸の皆様にも御覧に入度と思ひしかと、せめて御咄の種にもと、おもしろ目出しの楓・草之花をおして持行、便りに右なる様子申て上んと思ぬ、

現代語訳

福住の座敷の一つである梅の間とは、室内に梅の模様があちこちに貼り付けてあり、床の間に梅を描いた

掛軸が飾られている。道具のほとんどにも梅の模様が付いている。部屋の入り口の上には「梅の間」と部屋の名前を掲示してある。どの部屋も梅の間と同様に、客が部屋をわかりやすいように配慮しているのである。(中略) 庭を眺めると、築山から水が流れており、それが井戸へと注いでいる。井戸の中から湯気が出てくる。この流れと井戸の水も湯なのである。庭の景色は、四月のはじめなので、土筆が生え、杜若などが植えてある。撫子や他の草花も築山にとりあわせとして植えてある。この美しく風流な庭の様子を江戸に居る懐かしい人たちにお目にかけたいものだと思った。見せることは叶わなければ、せめて話しの種として伝えたいと思い、趣ぶかい風情の芽が出たばかりの楓の葉や草花を押し花にして持ち帰り、江戸の人たちに手紙をしたためてこの庭の様子を伝えようと思った。

解説

先に掲載した写真3が福住の屋敷である。写真から補足しておく、敷地の手前に川、向こうに山が見える自然豊かな立地を充真院も目にして感動したゆえ、挿絵も描いたのである。堀をめぐらした敷地内に建物が連立した立派な宿である。間取りに興味がある充真院は、梅の間を詳細に観察して、その名にちなむ梅の装飾が部屋のあちこちにあることを確認している。宿なので部屋ごとに、入り口の上に部屋名の表示を掲示してあることも、充真院には珍しく感じられた。

庭を眺めて温泉地ならではの湯が流れ出ている様子を見たり、築山の土筆、杜若、撫子など季節の草花を目にして、風情ある庭に感動している。心を揺さぶられた庭の様子を、別れた江戸の親しい人たちに、見せたく思ったのは、庭の美しさが格別であり、充真院好みであったからである。感動を親しい人に伝えたく思う心は今も昔も同じである。そして、庭の草花や楓を貰い、押し花にして記念に持ち帰り、親しい人に手紙

で伝えようとしている様子から、草花を愛する繊細な心と、美しい草花を愛でる充真院の乙女心が感じられる。

史料四 四月十二日（七日目） 名物と海辺の風景

原文

是より藤河渡のよし、こゝは水瀬早くてこはき由、兼て聞しかは、との様成事哉と思ひしに、舟ふち高くして、かこのまゝのせ、水瀬の早き事なそは見えず、底浅く石にこりこり当り、思ひしには似すこはくもなくて、安う渡りつきぬれば、いわ測といへる所の小休、こゝは吉原と蒲原との間ならん、栗の粉餅名物之よし、との様成哉と思ひしに、餅にくりのこを附たるつまらぬ品也、此辺はめのう・水晶細工物有て、小休に持来り、少々整候、蒲原、昼休して、さつた峠は近比は通り申さずて、その下の倉沢といへる所を通るは、山のみもとを行、右は山高く、左は松なみ其ふりのよき、下に波打きわにて、海人の家居見へ、其松のふりのよき事、絵にも書たる様にて、枝たれ、其間より沖之方蟹のいとなみするも見へ、

現代語訳

これから富士川を渡るといふ。富士川は水の流れが速いので川渡りは怖いと以前、聞いていたので、どのような様子なのだろうと思つていた。私が川渡りする際の舟は縁が高く、駕籠から私は降りることなくそのまま舟に乗った。駕籠の窓から外をながめたけれど、川の流れが速い様子は見えなかった。富士川は川底が浅く、船底に石がこりこりとあつたけれど、想像していたよりも怖くなく、たやすく向こう岸に着いた。そして、岩淵という所で小休憩をした。岩淵は吉原と蒲原の間にある宿である。ここは栗の粉餅が名物であ

るといふ。栗の粉餅とは一体どのような物だろうと興味を持っていたが、実物は餅に栗の粉をまぶしただけの、つまらない物だった。この付近は瑪瑙と水晶細工が名産品なので、小休憩をしている宿にその品をいくつかつけてもらい、少し気にいったものを購入した。蒲原に到着して、ここで昼休みにした。ここを進むと次は薩埵峠である。しかし、近頃は薩埵峠は通らずに、その麓の倉沢という所を通るので、山の麓の道を進む。向って右側の山は高く、左側は松並木がありその枝振りが美しい、さらに左側の下は波打ち際で、漁師の家が建っているのが見える。松の枝振りが美しく、その様子は私が挿絵に描いたように、枝が海風のため斜めに垂れている。枝の間から海女たちが作業している様子が見える。

解説

旅に出る前に、富士川渡りの様子や街道沿いの地の名物について、情報収集をして知識を付けており、実際に現地自分で確認することを行動として実践している。情報は、他者から聞いたたり、書物を読んで知った。この東海道の名物は、『東海道名所図会』を読んで知っていたのであろう。名物であっても、自ら味わって確認している。栗の粉餅は、充真院の味覚には合わず、おいしくなかったのであろう、つまらない品と実にはつきりと感想を述べている。一方、瑪瑙細工や水晶細工は気に入る、少し購入した。

倉沢の景色を充真院はたいへん美しいと感じた。克明に文章に加えて挿絵(写真15)を添えた。山には薄墨で彩色して遠近感を出し、人物は無駄が一切ない少ない筆数で小さく器用に描いている。充真院は進行方向の右手にそびえる山、左手に広がる海、街道の松並木越しに浜辺の松や漁民の家、海女が漁をしている姿を目にした。美しい海と充真院にとって珍しい庶民の姿・家・営みは、旅ならではの出会いであった。なお、鳥瞰図のこの挿絵は、海上からの視点であり、充真院が進んだ松並木の街道を見下ろすように描いている。



写真15 倉沢の景色

史料五 四月十四日（九日目） 親戚掛川藩との
近しさ

原文

町なる木戸やう成所に人多あつまり、何事哉と
めと、めし所、此方の両掛也、先供の人もあつま
り居、こ、よりちやうちんも付、太田様御領分
成故、皆揃行、少しも人の多様に見せ、先様よりも
御役人者出向ひ、是より下に下にて御城下成町
にては通るとて、みせはりて祭の様に見て有、猶
々外分あしく、まつ夜分にて、あら見へすよし、
着は五ツ半比に成し、太田様より御使者来り、皆
様よりとて兩人へかすてゐら・くわし、兩人に被
下候、

現代語訳

城下町の出入り口である木戸がある所に人が大
勢集まっている様子が見えた。一体、何事である
うかと見ていたところ、大勢の人たちは私たち内

藤家と当地の大名である太田家の役人たちであった。私たちの行列から先行して任務を果たしてくれていた供の者もそこにいた。この城下町に入る所から提灯を灯して、親戚筋である掛川藩の大名太田氏の領地であるので、随行員一同が揃って隊列を整えて城下町を進む。少しでも隊列が立派に見えるよう、隊列の人数を多くするために、太田家の役人が出迎えてくれた。そして、「下に、下に」と先払いが声を出しながら城下町を通行するので、一見したところは立派であり祭りのように賑やかに見えるだろう。それでも、私たちの行列は実際には立派ではないが、暗くなってきたので粗は見えないだろう。本陣には五つ半―午後九時―に到着した。太田様から使者の役人が本陣に挨拶に来て、太田家の皆様から私（充真院）と光姫への贈り物としてカステラと御菓子をそれぞれに用意して贈ってくれた。

解説

当時の内藤家当主の政擧は、掛川藩主太田資始の三男であり、内藤政義の後嗣として養子に入り家督を継いだ。そして、政擧の将来の奥方が、当時は許婚である十四歳の光姫であった。旅の行列の主人は充真院であり、さらにそれに続く重要な存在が光姫であると、太田家側は認識している。大切な親戚である内藤家の充真院と光姫の掛川城下通行に際して、太田家は充真院と光姫それぞれに、カステラと御菓子を贈った。カステラも御菓子であるが、わざわざ他の御菓子と別に特記したのは、充真院にとって南蛮菓子であるカステラは珍しいものだったからであろう。なお、光姫が慶応三年（一八六七）七月に死去したため、政擧と婚姻には至らなかった。

なお、掛川城下に入るにあたり、太田家から役人が来訪して充真院一行を出迎えるなど、厚遇をうけた。さらに城下通行時には、太田家にとって親戚筋の家人の行列なので、町の人々から見ても行列が立派に見える

るように、太田家の家中も加わり人数を増やすなど配慮しているのは、身分制社会における武士層のプライドでもある。

史料六 四月十九日(十四日) 尾張徳川家との近しき

原文

薄曇にて候へとも、降様にも思はれず、今日は尾州様より御船出る、御役人衆も出、安内にて、着かへなとして五ッ過に此宿を立出、小休して、又船宜敷との安内、舟場へ行は、役人衆大勢い下座し、(中略)此舟を見れば絵杯に有通りにて、白鳥丸といへるよし、此舟は御召ふね、公方様御上洛之節、御乗被遊、其様には出し不申、此度はかく別之御あひたからゆへ、この方に計出るとの事

現代語訳

薄曇りであるけれど、雨が降るようには見えない。今日は尾張徳川家が、桑名の渡しで乗る船を用意してくださる。尾張徳川家の役人たちが、私が宿泊している本陣にやってきて、渡し場まで案内してくださるということなので、着替えなど準備をして、午前八時過ぎに本陣を出発した。途中で小休憩をしていると、また、尾張徳川家からの案内があり、船の準備が整ったという。そこで、船着場に行くと、尾張徳川家の役人たちが大勢おり、平伏して私たちを迎えてくれた。(中略)この船を見ると、かつて絵などで見た通りの様子であり、船の名前は白鳥丸という。この船は特別な船であり、将軍が京都にお出かけになる際に、この桑名の渡しで乗船するよう尾張徳川家が用意したのであり、通常は将軍以外が乗船することはない。しかし今回は、内藤家と尾張徳川家は親戚筋という格別の間柄なので、乗船の便宜をはかってくださったということである。

解説

御三家の尾張徳川家と内藤家は当時親戚であった。政學の五代前の内藤家の当主である政脩まきのぶは、尾張徳川家の徳川宗陸の弟で、内藤政陽の養子となり、内藤家を継いだ。ゆえに、内藤家の菩提寺である鎌倉の光明寺の内藤家墓所にある政脩の宝篋印塔には、内藤家の下がり藤の紋の他に、尾張徳川家の葵の紋が刻んである。

桑名の渡しまで、充真院一行を尾張徳川家の家中がわざわざ案内してくれたり、さらに渡し場で丁寧な出迎えをうけた。加えて、充真院一行は、尾張徳川家の厚意により將軍並の破格の厚遇まで受けた。尾張徳川家が將軍にしか用立てしない白鳥丸を充真院に乗船させてくれたのである。本来は部屋住みの立場で生涯を送るはずだった政脩に、大名家の当主という立場を与えてくれた恩義がある重要な家であると、尾張徳川家が内藤家を認識していたからであろう。内藤家にとっても徳川家の一家である御三家と親戚筋になることは、ありがたく誉とすべき縁組であった。充真院は隠居の立場であるが、六本木屋敷の主人であり、当時、親戚らと祝儀・不祝儀の際に贈答儀礼や書簡のやりとり、藩主につぐ立場で関わっていたことは、一連の「万覚帳」から明らかである。充真院は隠居ながらも、冠婚葬祭の贈答儀礼を通して、親戚筋の家にとって重要な存在と認識されていた。

史料七 六月一日 五十四日目 島野浦から荒れる海を進む

原文

舟の少し静の時は慰に成、風につれて帆も上げ下げする事度々、下ける時は太鼓の拍子にてろをおし、波

高く上る時は舟もつれ上り、向の山も目の下にみゆる、波下る時は山は高く上る、跡にて聞は、帆柱は十八間もあらんか、其より浪の方高く成との事乍、居候て見れば、左程とも思はず乍、浪の底に入かと思ふ時もある、窓より浪二度打入水たらけに成し、台子の釜、一度かへり湯たらけに成し、皆は昨日より又よひ候人多（中略）私は薬をたへてやうやうとしのき、波の底に成時は、とふかしたらはふかきもせんかと心つかひ計、お光は夫にもかまわす、初は伏居しか、末には手元に有し箱を枕として高いひきにて寝、誠に浦山敷事と思ひ、砂野は私居候ま、よん処なくうつふしてしのき、あまり人少に成、義兵衛と尚格なそたのみて居、嶋之うら之引舟はいとま出し、延岡之地の舟出てかわる、何事なく、早ふ川口へ舟付様のみ信心、

現代語訳

波が穏やかで船の揺れ具合が少し静かな時は、心がほっとする。風の吹き方の強弱によつて、帆をあげたりおろしたりすることが何度もあつた。帆をおろす時は太鼓を打ちその合図に揃えて水夫たちが艀を操作する。大波がよせてきた時には、船が波の上を持ち上げられて高くあがり、向こうに見える山が目の下に見える程であるが、たちまち波が最高地点から下がると船も波と共に急降下して、山は視線よりも高い所に見える。後日、聞いたことによるとこの船の帆柱は、三二・四m程もあつたのではないかという。この大波以上に高い大波が来ることもあると言われたので、座つたまま覚悟していたけれど、もう先ほどよりも大波が来るようには思われなかつた。しかし、波の底に船がまきこまれてしまったのではないかと思う時もあった。大波が二回も船の窓から打ち寄せて入り、船内が海水だらけになつてしまつた。さらに、船内に備えていた点茶用の棚に置いてあつた釜が大波で揺れてひっくり返り、中に入つていたお湯が辺りいちめんにごぼれ出たことが一度あつた。船内は、今日は昨日よりも船酔いしている者が多い。（中略）私は船酔いの薬を飲ん

で、どうかしのいでいる。波の底にいるように思える時は、どうしたら船内に入ってきた海水を減らすことが出来るだろうか、私は気がでなかった。しかし、孫娘のお光はそれにもかまわず、はじめは船酔いで体を横たえていたが、そのうちに手元にあつた箱を枕代わりにして高いびきをかいて眠っている。お光の様子を見て、本当にうらやましいことだと思った。老女の砂野は私と一緒にいるものの、船酔いのため仕方なくうつ伏して耐えている。私の御付の女中たちが船酔いのため人手が足りないので、義兵衛と侍医の喜多尚格に身の周りの用を頼んで過ごした。ここから、引船を鳴野浦の船から延岡の船に交代した。無事に早く延岡の川口にこの船が到着するようにと、祈った。

解説

鳴野浦は一番最初に到着した延岡領である。ここを出発すれば、あとは船で海を渡り、五ヶ瀬川の河口をめざして延岡の城付地へ到着する。後少しであるが、海が大いに荒れてしまった。充真院らの船は大波に翻弄され、高波に持ち上げられたり、急激に下降したりを繰り返かえし、生きた心地がしなかった。荒波の様子と、それにより目にする景色が上下へ激しく移動する様を、充真院は臨場感溢れる表現で綴っている。恐ろしい思いを体験しても観察眼は鋭く、再現した文章も実に巧みである。帆柱の高さは誇張があるが、船内で激しい波で海水が浸入する様子や台子がひっくりかえる様子など、リアルかつ詳細に描写している。あまりの激しい揺れのため、充真院らは船酔いに苦しんだが、光姫が船酔いで横になっていたものの、いつの間にか高いびきをかいて寝ている様子は、ふと笑いをさそう。ユーモアを解する充真院らしい文章である。

史料八 六月一日 五十四日目 方財浜の美しい景色とすばらしいお出迎えに感動する

原文

かたかたはほうさい之浜、かたかたは山に前々の所には岩有て、夫に波の打ちかゝる気色、何ともいわん方なく面白くて、少しよひし心地もうち忘れて下へおり詠、浜には向之用人を初、役々の人上下に居ならひ平ふく、其跡には一はい男女敷物を敷てなみ居、誠にり、敷、うれしくて、皆ふせし人々もおき、其様子を見、此気色は中々絵にも尽しかね、

現代語訳

一方には方財浜が見え、反対側には山がありその手前には岩がある。その岩に波が打ち寄せている風景は、言葉にできないほど趣きがある。私は少し船酔いで気分が悪かったけれど、そのことも忘れて船から浜において、その心をゆさぶった美しい風景から短歌を詠んだ。浜辺には延岡の重役を初め、様々な役人たちが列を成して平伏して私たちを迎えてくれた。役人たちの後には、大勢の男女たちが敷物を敷いて並んで座っていた。その出迎えの様子は、実に勇ましく、私はうれしくなった。船内で船酔いのため横になっていた者たちも起きあがり、船内から陸上のお出迎えの様子を見た。そのお出迎えの人々の様子はすばらしすぎて、かえって絵に描けないほどである。

解説

延岡の城付地に到着した。浜辺の岩に波が打ち寄せる美しい風景が、充真院を魅了した。言葉に出来ないほど美しいと充真院は記している。延岡の地で心打たれる美しい風景に迎えられた充真院は、船から下りて浜辺を歩き、短歌を詠んでおり、感動が実に深いものであったことが窺われる。しかも、役人の後ろには大勢の人々が充真院をお出迎えに待っており、その様子に充真院は大感激したのである。城付地の延岡で、充

真院の心を満たす風景と、人々の盛大なお出迎えをうけ、充真院は未知なる領地延岡に良い印象を持って、うれしく安堵したことであろう。

- (1) 講演会の中で充真院の著作から現代語訳を作成して紹介したのは、「充真院と学問」(亀井神社天神祭、二〇一六年)、「充真院と大樹寺参拝」(延岡市教育委員会・旭ひむか財団・夕刊デイリー新聞社主催、二〇一八年)、「延岡藩主夫人内藤充真院の好奇心」(延岡町つくり支援事業、二〇一八年)、「充真院著『五十三次ねむりの合の手』の魅力」(延岡市教育委員会・旭ひむか財団・夕刊デイリー新聞社主催、二〇一九年)である。その他、延岡市の岡富中学校、恒富中学校での授業でも、小冊子「延岡の歴史再発見 延岡藩主夫人内藤充真院の知的好奇心」(解説神崎、亀井の丘夢づくりの会、二〇一八年)に掲載した現代語訳を紹介した。右の講演で現代語訳を作成した著作は「色々見聞したる事を笑ひに書」、「海陸返り咲きこと葉の手拍子」(明治大学博物館所蔵内藤政道氏寄贈書、架号(二) 充真院(繁子) 関係(一) 一三)、「五十三次ねむりの合の手」の部分である。講演会のなかで、充真院の著作を現代語訳して紹介することを発案されたのは、夕刊デイリー新聞社の坂本光三郎氏である。現代語訳は声優の池田知聡氏や加古万里子氏に朗読していた。
- (2) 本章で紹介する八箇所について、明大翻刻本で該当する頁を、順に示しておこう。史料一は七頁、史料二は八〜九頁、史料三は一四頁、史料四は二一〜二二頁、史料五は二四頁、史料六は二八頁、史料七は八二頁、史料八は八三頁である。なお、私が現代語訳を作成した箇所のうち、伊能氏他三名らも現代語訳をなされている箇所が三箇所ある。具体的には、史料一の箇所は伊能氏らの論文の二三八頁でも扱っており、史料二は一三四頁、史料四の後半は一四二頁に現代語訳が掲載されている。

おわりに

以上、「五十三次ねむりの合の手」の書誌を検討し、挿絵から充真院の絵の力量を再認識し、文章表現を眺めてみた。原本をあらためて見直すことにより、充真院が質素を心がけて物を大切にしていた証拠や、挿絵のうち特に筆数を最小限に少なく小さく描いた箇所から、優れた描写力を有していたことや、薄墨の使い方が上手だったことを確認することができた。小さな指摘ではあるが、充真院の人間像について、新たにいくつか提示できたと思う。

なお、数々の挿絵にお付の者や光姫の姿を描いても、充真院は自らの姿を全く描かなかった。写真11のように、充真院が駕籠から出てくる直前の駕籠と周囲に控えるお付の者を描いても、自分の姿はあえて描かないのである。これは充真院の慎み深さによるのではなからうか。

さらに、充真院の文章の巧みさを文学として読み味わう楽しみの試みとして、原文から抜粋してささやかではあるが現代語訳を作成してみた。今後の課題としては、「五十三次ねむりの合の手」の全文を通じた現代語訳を完成したく思う。この著作を現代語訳を通して、多くの人々に読み味わっていただくことが夢である。